

しんらん同人

No.568

5・6
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

【佐々木善信師】(3月13日定例法座にて)



【鳥見浩憲師】(3月27日彼岸会法要にて)



◀ 法話中の様子(3/27)

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

直接聞かれることは無いのですが、死んだ者はどうなるのですかという質問が(私の中にも)あるように思われます。

先日、考えさせられる記事に出会いましたので、私なりに理解した範囲で記載致します。色々なご意見があると思いますが、機会がありましたらお聞かせください。

「死」「死後」について考える時に三つのタイプがあります。

第一は、死を宗教的教養として知識的に理解しようとする者。科学的に考えると、死後の存在は考えられない。それに対して宗教家は、どう説明するのか。霊魂不滅をどう証明するかを聞きたい。

これに対して釈尊は、「死後の有無を説くのは、戯論である」知識の世界では、来世の有無は實際上どれほどの意味もないと。理解することそのものを退けられました。

第二は、死に対する安心のために聞こうとする者。不治の病・老境・死への恐怖心のため、死後を解決しようと悩む者。こちらは知識の問題ではなく、いわば命がけて問う者。

しかし、死の恐怖に対して不死を得ようとしても、不死を獲得することは出来ません。

第二に、愛する人を亡くした人は、死後が存在しないことには耐えられなく、あくまでも死後の状態を確かめたいと思う者。

しかし、私がこの世に在る限り、生と死にかかわらず、親は親であり、子は子であるのです。また死をどの様に理解したとしても、親は子を離すことは出来ない。子は親を思わずにはいられないのであります。

親や子の死によって、別の世界を知る。もう一つの世界にあえば、そこには静かな安らぎを感じ、ほのかな喜びに包まれる。それが念仏の世界であると思えることが大切なことではないでしょうか。

合享



誓願寺 住職 古賀尚之 (2022年本堂にて)

悩みありて 悩みなし

幸福を願わ

ない者は一人もいない
であろう。だがその幸福とは何
であろうか。

まず幸福とは、一人一人自分自身
が感ずるものであろう。だから何を幸
福と思うか、それはその人その人によっ
て違うであろう。

では何を幸福と感ずるかを考えてみると、
不安がないこと、悲しみや苦しみにあわな
いこと、自分の思うようになることでは
ないであろうか。

自分の思うようになるということは、自分
の欲望が満たされるということではないであ
ろうか。その欲望も色々あるし、限りなく起
こって来るものだから、それをひとつひとつ
満たしていくことは大変なことであるし、全
てが思うようにならないから、困るのであ
る。

長生きしたい、病気になるたくない、健
康でありたい、金持ちになりたい、家内円
満に暮らしたいと思っても全てが思うよ
うにならない、そこに苦しみがああり、悲
しまずにはおれないのである。

親鸞聖人も、今から八百年前に人間
としてお生まれになった。そして

九十年の生涯を終えて浄土の人となられたの
であります。聖人は人間としての悲しみや
苦しみにお会いになった。

八歳の時には両親を失い孤児となられた。
不幸せな子供時代も過ごされた。八十四歳の
頃には長男の善鸞さまを勤当せられるという
断腸の悲苦を受けられた。

晩年更にご臨終の時には、奥様の恵信尼公
はおそばに居られず、越後においてになっ
た。その他にも知られていない様々な苦しみ
や悲しみにお会いになったことでありまし
う。

「人間は重い荷物を背負って歩いている」
といった人がいます。仏教ではこれを業と言
っています。人間に生まれたことも、良いこ
とも、悪いことも、全て業だといわれる。
これは自らが作り出したものであって、他
人の介入を許さない。

重い荷物だからと言って他人に背負わせる
ことは出来ない。捨てることも出来ず、自分
で背負っていくよりほかはない。この重い荷
物を背負っている姿が、迷いの世界である。生
死の世界である。

「いづれの行もおよび難き身なれば、地獄
は一定すみかぞかし」 どうしてもそこから逃
れることは出来ない。地獄行きである。

「いづ

れの行にても、生死を離るること
あるべからざる」この身を、哀れ
みたもうて「救わずばやまぬ」との
願がおこされ、それが仕上げられたの
が、南無阿弥陀仏である。

どうしようもないこの私を哀れみたま
い、撰取して捨て給わぬのである。

大悲の光に照らされていただくと「罪障功
徳の体となる、氷と水の如くなり。氷多きに
水多し、さわり多きに徳多し」という世界が
開けてくるのである。

悲しみや苦しみから逃げようともがくので
はなく、その姿を我が身の業と感じ、素直に
受け止め、かかる者を救いたもうお慈悲の中
と知らしめられる時、悲しみも苦しきも転じ
て「おかげさまで」と念仏申されるのであ
る。

病苦であろうと、貧苦であろうとその
中に生き抜くものこそ念仏なのです。
されば「念仏は無碍の一道なり」
と言われるのであります。



誓願寺初代住職
故 岡本泰雄

副住職
法話

古賀明德

「小欲知足」について

お釈迦様の前世のお話「ジャータカ」に、鳥の王様だったころのお話があります。

様々な動物が住んでいて、食べものなどは生活に困らないほどは満たされた大きな森がありました。でも、そこに住む鳥たちは外の世界が見てみたいと王様に頼みました。王様は鳥たちの要望に応え、鳥たちを連れて森の外に出ました。初めて見る景色や雪に、鳥たちは大変感動しました。その中で一匹のめんどりが、大変食べ物が豊かな場所を見つけました。でも、誰にもとられたくないと思い、仲間たちに「食べ物がたくさんあふれるところを見つけたが、そこには象や馬にひかされた車がたくさん走っている。危ないから決して行ってはいけませんよ。」と嘘をつきました。周りの鳥たちからは、危ないところを教えてくださいと大変感謝されました。翌日、めんどりがその場所で食べ物を食べていると、本当に勢いよく走ってきた荷車には



く走ってきた荷車には

ねられていのちを落としてしまいました。目の前のおいしい食べ物に、もっともつと惑わされ、まだ大丈夫、まだ大丈夫と思っているうちに、飛び上がることを忘れてしまったのです。鳥の王様は本当のことを知って、「めんどりは他の鳥たちには禁じていながら、自分でそこへ出かけて行って荷車にひかれてしまった。めんどりは自分の欲に負けいのちを落としたのだ。」と説かれました。



私たちは今与えられているものだけでは、なかなか満足できません。もっともつと、より多くのものを求めてしまいます。そして、一度それが手に入ると仲間であっても差し出そうとは本当に思うことはできません。

仏教で説かれる「少欲知足」という言葉には、少ないものでも、それ以上望まず、満足することと辞書にはありますが、自分に今与えられている様々なご縁を、大きい小さい良い悪いとは見ずにひとつひとつ尊いことなのだと受け取る心であると思います。今一度、大変な目に合う前に自分に与えられているご縁に感謝させていただきましょう。

ご法座等 のご案内

関東地方にコロナによる緊急事態宣言が発令されている期間は、諸活動を中止致します。ただし蔓延防止期間中は活動の予定です。詳細は「ホームページ」等でご確認ください。

5月

5・8
(日)■午前十時～
定例法座

【三島晃真師】

■正午～

医療相談

【佐藤公彦医師】

5・15
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生までとその保護者)

5・22
(日)

■午後一時～

永代経特別法座

・祥月命日合同法要

【古賀明徳師】

6月

6・12
(日)■午前十時～
定例法座

【上野隆平師】

■正午～

医療相談

【佐藤公彦医師】

6・19
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生までとその保護者)

6・26
(日)

■午後一時～

定例法座・祥月命日合同法要

【渡辺幸司師】

編集後記



・コロナ感染が危惧されていましたが、三月・四月と定例法座を無事開催する事が出来ました。お参りの皆様にはご自身の体調管理に注意の上、またお寺は三密を避けてと、出来る限りの対策の中での実施でした。

・お参りの皆様も、少しずつ元に戻っていますが、くれぐれも無理はしないでください。

・ベトナムから一時帰国中の孫たちは、近くの富士見台小学校に一学期までは通学予定です。富士見台小学校卒業の坊守は、後輩が出来たと喜んでいます。

・五月の永代経法要は、副住職・古賀明徳師が大恩寺と誓願寺で講師を務めます。こればかりは親ばかりかでしょうか心配ですが、これからの時代を背負っていく試練でしょう。



〔小学校に登校する孫〕



〔法話をする副住職〕